SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter　Your Financial Brain　豊島 健治

「東京三菱の決断」が意味するもの

今月初、資金量では世界ナンバーワンであるが、収益力等の質的側面では世界のベスト３０にも入らないと言われる日本最強の東京三菱銀行がある決断をくだした。
それは一昨日、９月中間期の業績修正という形で発表され、昨日の新聞に大きく報道された。内容は新聞報道の通りで、今９月中間決算に於いて、不良債権償却と子会社支援で１兆２千億円の損失処理を行い、９千億円の赤字決算になるというものである。

不良債権償却や子会社の後始末で銀行が赤字決算にすること自体は、とりたてて珍しい事ではない。ここ２、３年大手銀行から地方銀行まで続々と赤字決算をしているからだ。しかし、今回の東京三菱の決断は日本の銀行界に衝撃を与えたと想像される。この決断の意味するものを私なりに探ってみたい。

ご存知のように東京三菱は日本最強の銀行である。ムーディーズ社の格付けはＡａ２で日本最高、ディスクロージャーで最も厳しい対応を迫られるニューヨーク市場に株式を上場してもいる。また、都市銀では不良債権が最も少なく、保有資産（株式、土地）の含み益は逆に最も多い。赤字決算にしなくても、あと１～２年で不良債権を完全に消せる力のある銀行と言われていた。その東京三菱がこの９月中間期に大幅赤字を計上するという。「やられた」、他の大手銀行役員達はおそらく追い詰められたような感覚を抱いたに違いない。

東京三菱は今回の処理で、債権償却特別勘定残高が１兆３千億円となり、公表不良債権（９年３月決算で１兆１千５百億円強）を上回る。帳簿上の処理とはいえ、不良債権引当率は１００％を超え大手銀行で初めて不良債権全額処理を終えることになる。そうした自信の現れか同行では「他の都市銀行上位行との経営、業務の比較はしない」と言っている。
今回の処理で東京三菱の財務面での優位性が一層明確となり、他の都銀との経営格差が更に拡大することになる。「もう競争相手はあなた達ではない」と宣告された他行は心穏やかであるはずもない。

これから他の大手銀行の出方が注目される所だが、東京三菱に追随できるのは住友と三和の二行くらいと言われている。富士や一勧でも難しいと言うのが大方の見方だ。ましてそれ以下の都銀は長銀のように外資とでも提携するしか生き延びる道はないと見られている。

都銀を中心とした日本の金融システムは、他の銀行の動きを見て経営戦略を立てるのを常としてきた。金融の自由化・国際化が言われながら、大蔵当局の行政指導のもとに、協議・相談を基本としながら、目立たぬように進むというかつての護送船団的体質がなかなか抜けなかった。しかしここで、東京三菱は日本の銀行に訣別して我が道を行くというメッセージを発したように思われる。この意味するものは重要だ。

この「東京三菱の決断」と対極に位置しているのが北海道拓殖銀行である。新聞報道によると、地方銀行の北海道銀行との合併が破談となり、当局の支援も仰ぎながら都銀・興長銀・信託銀及び生損保各社に総額１，５００億円の増資要請に歩いているという。
あわれ弱小地銀（北海道銀行）にも袖にされ生延びる事さえおぼつかない拓銀は、「我が道を行く」どころではなく全くの展望が開けない状態にある。こうした銀行と取引をもつ北海道の中小企業の不安は察するに余りあるが、といってマーケットは駄目な金融機関を生き延ばさせるほどお人好しではない。株価は１００円近くまで売り込まれ、３月以降かなりの預金が引き出されてもいる。
もし当局が、拓銀単独ではこの危機を乗り越えられないと金融界全体での支援を考えているとしたら、更なる売りを浴びせられると覚悟すべきだろう。

こうした中での「東京三菱の決断」は、単に、有力銀行がようやくバブルの清算を終えて健全な銀行に立ち戻ったということに意味があるのではなく、グローバルレベルでの金融変化の中で、世界金融競争に果敢に参加して行く決意表明という意味を持っているのだと思う。
ビッグバンは資産家にとっては花園かもしれないが、固有の顔をもたない金融機関にとっては地獄になるのかもしれない。

TEL. 0438－53－6092　FAX. 0438－53－6096
Nifty－ID　BZH10642　E－mail　f3583079@nv. aif. or. jp